

名作再読、拾い読み(3)

『グレート・ギャツビー』 ("The Great Gatsby")

小澤 文彦

F. スコット・フィッツジェラルド(Francis Scott Key Fitzgerald, 1896-1940)は、ヘミングウェイ、フォークナーと並んで「ロスト・ジェネレーション」を代表するアメリカ合衆国ミネソタ州生まれの作家です。第一次世界大戦時にプリンストン大学を中退して陸軍に入り、アラバマの駐屯地で「アラバマとジョージアと、二州にならびなき美人」であるゼルダ・セイヤーと出会い、恋仲になりました。彼女は裕福な名家の娘で、彼を愛していても貧乏暮らしを恐れて結婚には踏み切れません。フィッツジェラルドは必死になって小説を書き続け、『楽園のこちら側(*This Side of Paradise*, 1920)』を発表します。この作品が大反響を呼び、一気に有名人となった彼はゼルダと結婚することができました。1920年代という未曾有の好景気に沸き立っていた時代に、美女と名声と金を獲得したフィッツジェラルドは、ジャズ・エイジの旗手としてゼルダと共に派手で乱脈な社交生活を続けます。しかし、1929年の大恐慌を境にして彼の人気はたちまち衰え、彼は過労と深酒で健康を害し、ゼルダは精神病で入院します。生活に困窮した彼はハリウッドで脚本家として働きますが、『最後の大王 (*Last Tycoon*, 1941)』を執筆中に心不全で亡くなります。44歳の若さでした。

今回は、彼の傑作といわれる『グレート・ギャツビー(*The Great Gatsby*, 1925)』をお薦めしたいと思います。夢を諦めきれずに追い求めて悲劇的の死を遂げる青年ギャツビーの物語です。

ニューヨーク郊外のロング・アイランドにあるウェスト・エッグに中西部出身のニック・キャラウェイが引っ越してきます。隣の大豪邸では毎週末豪華なパーティーが開かれていました。そこに集まる客達は殆どが豪邸の持ち主であるギャツビーについて正確なことを知らず、彼の過去について悪い噂ばかり話し合っています。入り江の対岸にある邸宅ではニックの親戚のデイジーが夫のトム・ピュキヤンと豪勢に暮らしていました。ある日、ニックはギャツビーからデイジーと会う機会を作って欲しいと頼まれます。ギャツビーは、5年前にデイジーと愛し合っていたのですが、ヨーロッパ戦線から戻ってきた時には、デイジーは裕福なトムと結婚していました。ギャツビーはあらゆる手段を使って財産を築き上げ、デイジーの邸の見える入り江の丁度反対側に家を買ったのです。ニックの家で再会を果たした二人はより戻したかに見えましたが、トムとギャツビーが激しい口論をしたため、デイジーは取り乱してしまい、車を運転中に道路に飛び出してきたトムの愛人マートルを轢いてそのまま逃走します。マートルの夫ウィルソンは、トムに耳打ちされてギャツビーがマートルを轢いた犯人と思いにみ、ギャツビーをピストルで撃って自分も自殺します。デイジーはギャツビーの葬儀に顔を見せるどころか、トムと一緒に旅行に出掛けてしまいます……。

あらずじは以上です。愛人を困ったり粗暴な振る舞いをするトムや、人を轢いた自分をかばってくれたギャツビーの葬儀に参列もしないデイジーの姿とは対照的に、闇の取引に関わる程の度胸を持ったギャツビーが、いざデイジーと再会するとなると気弱な様子を見せたり、ニックの「過去は繰り返せないよ」という忠告にも拘わらず、「何もかも、前とまったく同じようにしてみせませう」と言い切ってデイジーと結婚をやり直せると信じているギャツビーの姿を思うと、ニックが「あなたには、あいつらをみんないっしょにただけの値打ちがある」^{(*)1}と叫ぶ気持ちが良い理解できます。そこに「グレート」という形容詞が付けられた理由があるでしょう。

次に示してある結末の文章には、不可能な夢を追い求めながら滅んでゆく者に対する哀しみが美しく描かれています。

Gatsby believed in the green light, the orgiastic future that year by year recedes before us. It eluded us then, but that's no matter — tomorrow we will run faster, stretch out our arms farther And one fine morning

So we beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past.^{(*)2}

(ギャツビーは緑の灯火を信じていた。年を追うごとに我々の前からどんどん遠のいていく、陶酔に満ちた未来を。それはあのとき我々の手からすり抜けていった。でもまだ大丈夫。明日はもっと速く走ろう。両腕をもっと先まで差し出そう。…… そうすればある晴れた朝に

だからこそ我々は、前へ前へと進み続けるのだ。流れに立ち向かうボートのように、絶え間なく過去へと押し戻されながら。)^{(*)3}

注*)1 『グレート・ギャツビー』野崎孝訳(新潮社, 2004) p. 214

(*)2 The Great Gatsby (Charles Scribner's, 1953) p. 218

(*)3 『グレート・ギャツビー』村上春樹訳(中央公論新社, 2006) pp. 325-326